

博士学位論文（東京音楽大学）
Doctoral Thesis (Tokyo College of Music)

氏名	石岡 千弘
フリガナ	イシオカ チヒロ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第1号
学位授与年月日	平成29年3月18日
学位授与機関	東京音楽大学
学位論文題目	セルゲイ・ボルトキエヴィチ研究 —自筆資料に基づく生涯・音楽観・ピアノ作品の考察—

Name	Ishioka, Chihiro
Name of Degree	Doctor of Musical Arts (D.M.A.)
Degree Number	Haku-no.1
Date	March 18, 2017
Grantor	Tokyo College of Music, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	The Comprehensive Study of Sergei Bortkiewicz —An analysis of his life, view of music, and piano works based on his autographs—

セルゲイ・ボルトキエヴィチ研究

— 自筆資料に基づく生涯・音楽観・ピアノ作品の考察 —

石岡 千弘

【要旨】

セルゲイ・ボルトキエヴィチ Сергей Борткевич (1877-1952) は、20 世紀前半のウィーンを中心に活動したピアニスト＝作曲家であり、没後、知られざる作曲家の一群に埋没した。近年、自筆譜や初版譜の発見とともに新たな関心が芽生えているが、彼に対する学術研究はいまだ端緒についたばかりである。そこで本論文は、研究の現状と資料状況、生涯と音楽観、ピアノ作品とその特徴、という大きく 3 つの視点から、それぞれに 1 部を当てて論じている。

第 I 部では、まず第 1 章において、ボルトキエヴィチ研究の現状が確認される。先行研究はいずれも彼の基礎研究として意義が認められるが、人生と作品とが密接に関連付けられてはならず、彼の音楽観を明らかにし、それを踏まえて作品を論じているものはない。また、彼の自伝や書簡などの自筆資料の状況を網羅的に整理したものもない。従って、彼の自筆資料を網羅的に整理し今後の学術研究の基盤を提供すること、また、彼の人生と作品を密接に関連付けて論じることにより、彼の音楽を捉える確かな視点が得られることが確認される。

第 2 章では、ボルトキエヴィチの資料状況が整理され考察される。彼が執筆した自伝や、自筆の書簡などについて、その概要が一覧化される。この作業により、彼の自筆資料は予想以上に豊富に残され、私たちにとりアプローチ可能であることが明らかとなる。さらに、ボルトキエヴィチの自筆の資料や書簡をもとに、全作品の目録が作成され、現在アクセス可能な自筆譜の所在が一覧化される。

第 II 部では、第 3 章においてボルトキエヴィチの生涯を、主に彼の居住地をもとに 8 つの時期に分け、自伝や書簡をもとに彼の人格形成に影響を与えた主要な出来事が時系列で示される。ロシア帝国の貴族階級出身のボルトキエヴィチは、20 世紀前半の政治・社会的混乱の中、何

度も生活基盤の立て直しを余儀なくされ生活に困窮していた一方、音楽活動を精力的に行ったこと、また、ダーレンとの友情の重要性が明らかとなる。

第4章では、ボルトキエヴィチの生涯を基に彼の音楽観が抽出される。音楽観形成の背景について、「音楽教育の影響」、「ウクライナ性とロシア性」、「ロシア革命の影響」、「ウィーンとの親和性」、「望郷の念」の5つのテーマが論じられ、彼が失われた過去の美しい思い出を常に懐かしみ、その郷愁の念を終生抱いていたことが明らかとなる。そして、彼がこのような苦難に満ちた経験を通して、後期ロマン派の様式に立脚しつつ、ロシア的な要素を取り入れた叙情性豊かな作風を貫き、傑作を数多く生み出すことよりも日常生活の中でより身近に音楽を実践することを目指す、という音楽観を形成したことが明らかとなる。

第Ⅲ部では、第Ⅱ部で明らかにしたボルトキエヴィチの生涯と音楽観を踏まえ、彼のピアノ作品の特徴が見出される。第5章では、これまで議論されなかったボルトキエヴィチのピアノ作品の分類法について、彼が意図した演奏場面を軸に「コンサート・ピース」、「サロンの小品」、「教育目的の作品」の3つのカテゴリーが提示される。そして、その分類法に基づき、協奏的作品と連弾を含むボルトキエヴィチの現存するピアノ作品全44曲が分類され一覧化される。この結果、サロンの小品が大多数を占めていることが明らかとなり、これには家庭での音楽活動を重視していた彼の音楽観が反映されていることが指摘される。

第6章では、ボルトキエヴィチのピアノ作品の構成と特徴が一覧で示され、第5章で提示された各カテゴリーの特徴について譜例を交えつつ論じられる。コンサート・ピースでは、協奏的作品とピアノ・ソナタの主題や主要旋律の回帰の多くが、聴き手に強い印象を与える手法でなされている。これは、ボルトキエヴィチの音楽観の背景にある、「郷愁」という過去を振り返り懐かしむ姿勢に照らすと、その回帰に一層特別な意味を見いだすことができ、それを踏まえて彼の作品を解釈し演奏することが大切となることを示している。またエチュードでは、《12の新しいエチュード Op. 29》で響きの斬新さが試みられるものの、この試みはその後の作品においては追求されず、後期ロマン派のスタイルに戻っている。サロンの小品については、「スムーズな流れ」、「シンプルなテクスチャー」、「シンプルな技巧」、「音楽の作りの変化-転調の点から-」という4つの特徴が論じられる。教育的作品については、「音楽の簡潔さ」、「指示の明確さ」、「幼少期が題材」という3つの特徴が論じられ、さらに「作曲者の意図」として、ボルトキエヴィチが子供向けの作品に対し、音楽的な感性や成熟した表現力が必要不可欠だと考えていたことが示される。

第7章では、第5章で示された3つのカテゴリーに横断的に見られる特徴について、演奏の観点からは、ボルトキエヴィチ独自のペダル表記と、声部の弾き分けについて、作品の観点からは、作品間にまたがって見られる旋律やモチーフの類似性と、ロシアの素材の引用について、論じられる。

以上により、本論文では、ボルトキエヴィチ自身が記した資料や作品が網羅的に整理され、今後の学術研究の基盤が提供される。また、これらの資料の読解から、ボルトキエヴィチの音楽観の核は、後期ロマン派の様式、ロシア的な要素、叙情性豊かな作風、身近に音楽を実践することだということが初めて明らかとなる。さらに、初の試みとして、ボルトキエヴィチの作品を作曲者が意図した演奏場面を軸に3つのカテゴリーに分類する方法が提案され、彼の音楽観と作品が結びつけて論じられ、ボルトキエヴィチの音楽を捉える新たな視点が提示される。そして、身近に「音楽する」という視点から作品を捉えることを通して、ともすれば難解で斬新な音楽が高く評価されがちな現代において、音楽の評価基準そのものを変える新たな可能性が拓けるのではないかと指摘している。